

未熟な僕のように生きよ  
ルカによる福音書 22 : 24 - 30

22:24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。 22:25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。 22:26 しかし、あなたがたはそれではない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者ようになり、上に立つ人は、仕える者ようになりなさい。 22:27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。 22:28 あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。 22:29 だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。 22:30 あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。

「偉い人は若い者（つまり「未熟な者」）のように、上に立つ人は仕えるもののように」というのは、これは謙遜の勧めですね。日本人の感性に合っていると思います。実際皆さんが職場や近所づきあいで経験することは、本当に尊敬できる人は謙虚な人ではないでしょうか。会社の社長も、実際には部下を尊重しその指示に従わなければならないことはいくらもあるわけです。組織の中で長たる者は、一番従順でなければならないのかもしれない。「実るほど首を垂れる稲穂かな」というわけです。

もちろん、下にいる者もなかなか辛いものがあります。責任が少ないとはいえ、それなりの責任は負わされるのですから。人の上下は時として心を潰します。指示命令、怒られたり、侮辱されたり、果ては人格まで否定されたり。パワハラだ何だと色々言われていますが、結局のところ、それでも謙虚にということは社会人になるための洗礼なのかもしれません。

そうやって下積みを経験した人が上に立った時に、なお謙虚でいられるかどうかは一つの問題ですね。公務員のことを「公僕」なんて言いますが、本当に謙虚な人がいるものですが、時にはちょっとした言葉のあやで傷ついてしまうことも起こります。

人間の遺伝子の99%がチンパンジーと同じだと言われています。だから猿山を作るのは当然と言えば当然。けれども残りの1%で、上に立つ者の謙虚という考えが出てきて、ひょっとしたらこれが人類を偉大なものにしているのかもしれない。

そうは言っても、99%の影響はやはり強いわけで、人の上下に苦しむことはあるわけです。明治時代に一番自殺率の高かった職業をご存知ですか。お手伝いさんだったそうです。今の家政婦と違って、当時は住み込みですからね、家族の中にあって一ランク低い人とみなされるわけですから、現代の嫁と姑の確執ですら過酷な状況で、そういう立場の女

性たちがどんなに苦勞したか、想像することすらできません。中には親切なご主人もいて家族同然に扱ってくれるところもあったかもしれませんが、「人権」という言葉も「パワハラ」という言葉もない時代のことですからねえ。やって当たり前、やらなければ叱られる。褒められることも感謝されることも、まったくない環境だった人もたくさんいたことでしょう。

金子みすずは、有名な詩人ですが、ある程度裕福な家庭だったのですが、家族関係が悪くて、夫の素行が悪く、淋病をうつされ、離婚後娘を相手方に奪われ、最後は服毒自殺をしたそうです。女流作家だからといって、今日のように評価も尊敬もされませんでした。その生涯の悲慘を思うと、当時女性の置かれた立場の過酷さがわかります。お金のある家ですらこうですから、貧乏なお手伝いさんは本当に大変だったろうと思うのです。「みんなちがって、みんないい」という言葉の重さは、人の上下が当たり前の当時を思うと、一層ではないでしょうか。

地球を三分の一の周ほど西に行きますと、パレスチナやエジプト、ローマなど地中海世界になります。今から2000年前のこの地方は、奴隷制度が布かれていました。ここでも人の上下は過酷なものがあったことは想像に難くありません。

キリスト教は奴隷階級にも浸透していきました。奴隷が全部キリスト者になったわけはありませんが、キリスト教徒になった奴隷たちの中には、イエスの教えに心を惹かれた人も少なからずいたのではないのでしょうか。「偉い人は未熟な者のように」「上に立つ人は、仕える者に」と教え、それを実践している弟子たちの姿は、本当に驚きだったと思うのです。そしてキリスト教徒になった奴隷たちは、まさに自分たちが主人に仕えている奴隷としての姿こそ、キリストに従う姿だと、思ったに違いありません。誰もが奴隷から自由人になりたがった時代に、自由人になるチャンスがあってもあえて奴隷の境遇にとどまるクリスチャンもいたわけですから（Iコリント 7:20,24）。世の中の価値観とは真逆の生き方でした。

イエス様は、給仕される者であるよりも「給仕する者」であられ、とおっしゃいました。使徒パウロもそれを勧めています（Iコリント 7:20,24）。その方が幸せだということです。まさに逆転の価値観です。誰かに愛の業を行ったとしても、それに対して感謝もなければ褒められもしない。肯定的な評価のない世界で生き続ける。いつまでたってもワン・ランク下の人間であり、未熟者であり続けるわけです。奴隷だから当たり前でした。しかし、その方が幸せだというのはどういうことでしょうか。

自分の不注意でペットの犬をひき殺してしまい、毎日自責の念にさいなまれているという人がいました。「慰めの言葉もない」というのは、まさにこのことかと思えます。皆さんなら、この方に、どのような言葉をかけますか。

難しいと思ったのは、大切にしている価値、生きがいだったものを、この人はもはや追及できないということです。たいていの人は、生きがいを目指すことで元気を取り戻します。でもその生きがいがない。そういう人をどう助けましょうか。

でも、とにかく私は、カウンセリングの技法にのっとして（いわば定石通り）、目標を書いてみました。「嘆きや罪責感に適切に対処しながら、その人が大切にしている価値を追求する。」価値というのは、人によって違う面がありますが、見返りを求めないという点で共通しているのです。そこで、はたと気が付きました。そうであるとするならば、愛犬を愛するという事は、愛犬が死んだからといって終わってしまうものではないのではないかと。そこで目標を次のように書き改めました。「嘆きや罪責感に適切に対処しながら、愛犬を愛することを続ける。」そして次のようなコメントを付けました。

あなたは、相手から感謝などの結果が返ってこなくとも、愛しますよね。結果を期待するのは人情ですが、それが必ずなければならぬと考えると、それは打算であり、相手へのコントロールですよ。そうならばそれは愛ではなくなります。無償の愛は返事が返ってこなくとも、相手のためになると信じたことをし続けることです。あなたの愛犬は、もはやあなたに返事をする事ができないところに行ってしまいました。それでもあなたは彼(彼女)を愛し続けることができるのではないのでしょうか。相手の魂が天国に行っている信じること愛ではないのでしょうか？彼(彼女)が地上にいた証しを語るとか、お墓を建てるとか・・・まだまだすることはあるのです。

死別は悲しいことですが、それで愛が終わることはないのです。なぜなら愛は無償の愛だからです。返事が来なくても愛する愛だからです。

それは奴隷たちが日々行っていることと共通しています。主人にどんなに仕えたからと言って、感謝もされず褒められもせず、昇進も昇給もない、半人前の僕です。どんなよいことをしても当たり前のことをしているだけです(17:7-10)。しかし、それでいい。無償の愛は、それができるということだけで報酬なのです。生きがいという報酬、生きる活力という報酬を与えてくれる、無償の愛にはそういう性質があります。

西仙台教会の特徴を一言でいうなら、「教会に来るのが楽しみな、そんな教会」ということではないでしょうか。特定の教派の重みのある教会論や歴史のある伝統はありませんが、これが私達の伝統だと思うのです。そしてこのささやかな伝統を支えているのが互いに仕えあうということではないでしょうか。その中にはもちろん亡くなった方々を愛することも含まれています。秋の永眠者記念礼拝では、信者だけではなく、そうではない家族のことも記念すべきではないかと思えます。

神様はイエス様を通して、神様がどのように私たちを愛してくださっているかを教えてくださいました。それは一方通行の愛です。あなた方から何も返ってこなくても私はあなたたちを愛する。これが神様の決意です。このように愛されているなら、わたしたちもこのように愛そうではありませんか。このように愛するなら、何の見返りがなくても、私達には不思議な活力と満足が与えられます。